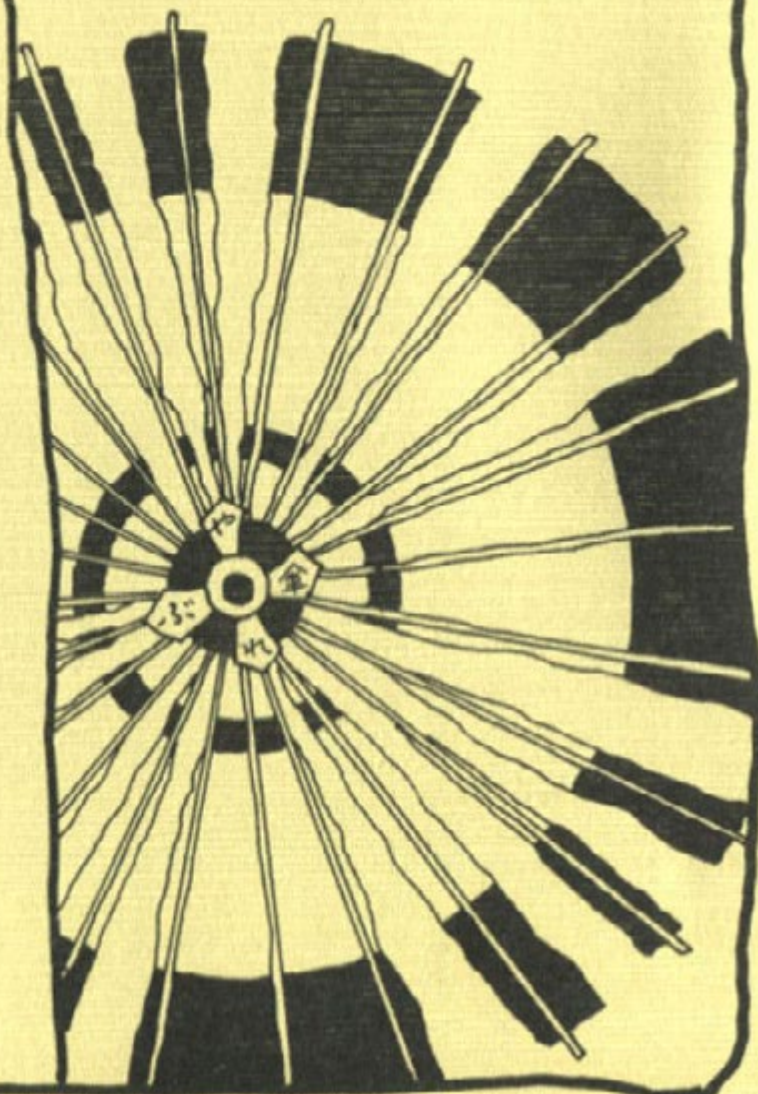


# やぶれ傘



八十九号

二〇一六年四月

魚は氷に人は脚立に上りけり	根橋宏次
人影の鯉に喰はるる寒の明け	きぐちきみえ
落ち椿隅に積まれて錆びにけり	大島英昭
入り口の小さきうどん屋鳥曇り	丑久保 勲
五羽六羽雀来てゐる初桜	廣瀬雅男
紫木蓮まだ見え宵の星ひとつ	藤井美晴
土手青み川の流れの空晴るる	渡邊孝彦
川沿ひはうすみどり色春の雨	白石正躬
麦踏んできたる地下足袋洗ひけり	瀬島洒望
一望に東京駅を萑苜サラダ	安藤久美子
鳥歸る都電一日乗車券	菊池洋子
春昼の砂場の縁に泥団子	青谷小枝
軽き音春田の中の耕耘機	久世孝雄
春大根さげて和尚の戻りくる	秋山信行
一番星見つけて春の立ちにけり	小山ようこ

抄 集 句 選 夫 紀 崎 大 傘 ぶ や

黄水仙岬の先に海ひかり	有賀昌子
春一番ビニール傘を追ひまはす	松村光典
土手よりの二軍観戦よもぎ摘む	萩原久代
下萌えや盛塩したる地鎮祭	本郷美代子
探梅は旧家巡りとなりにけり	村田 武
古書店にぶらり立寄る春の屋	山本久枝
露の薑苦味ほんのり舌の上	安斉正蔵
冴返る地下深きより上り来て	岩藤礼子
ふんはりと和紙にくるんで雛納め	奥田温子
新聞とりモコンのある春炬燵	上林富子
一輪の椿を活けて客間とし	國保八江
村長の屋敷畑に露の薑	黒澤次郎
ぽつかりと浮かぶ雲あり花辛夷	齋藤 朋子
七階の終の栖や月おぼろ	鈴木昌子
千代紙の小箱に干菓子春隣	貫井照子

地下足袋

瀬島洒望

昼月や枯れ芝に猫うづくまり  
ややいびつ昨夜の寒満月よりも  
雪催ひ痰切り飴が届きけり  
窓際にギリシヤの壺と猫の仔と  
寄り道を浅草橋の雛市に  
昼過ぎの風変りけり夏蜜柑  
雪しろの流れをちこち安曇野に  
麦踏んできたる地下足袋洗ひけり  
「おぼえた」と孫が折る鶴春の夜  
高きにも低きにもあり花菜畑

春  
埃

安藤久美子

粕汁のさうこの味がいいと言ふ  
一望に東京駅を蒿苳サラダ  
階段の一段づつに春埃  
紫雲英咲く知人の家はその先に  
銀座より日比谷見附へ春時雨  
陽だまりの椅子に似合ひの春帽子  
囀りへ正午を告げる鳩時計  
蒲公英の野に座るとき遠き鐘  
摘草や野にやはらかき音の生れ  
まだ解けぬ昨日のパズルクワッカス

春  
昼

青谷小枝

春夕焼土手のその先防波堤  
なんにでも若布や磯の料理小屋  
花おぼろ紡ひし舟を潮の打つ  
あたたかや水彩絵具よく滲む  
ダム湖への取り付け道路山わらふ  
きりん組パンダ象組卒園す  
横顔の鼻に眼鏡や春おぼろ  
木の芽出て一日雨の降る予報  
土曜日の公園通りチューリップ  
春昼の砂場の縁に泥だんご

鳥 帰 る

菊池洋子

枯 芝 を つ か み て 稚 の 立 ち あ が る  
を さ な ご の 両 手 の ひ ら の 龍 の 玉  
針 供 養 ジ ャ ン ボ 豆 腐 に 畳 針  
寒 雀 つ く ば ひ の 水 渴 き を り  
柵 抜 け て 寄 り くる 子 山 羊 下 萌 ゆ る  
春 霞 メ ガ ネ サ ロ ン の 洗 浄 器  
聴 く だ け の ラ ジ オ 体 操 春 の 風 邪  
落 石 の あ と を の こ し て 木 の 芽 山  
鳥 帰 る 都 電 一 日 乗 車 券  
菓 膳 の は し に 添 へ ら れ 露 の 臺

春 田

久世孝雄

鱒のあらの煮凝りにある目玉かな  
藁 蓑の雨の雫や寒牡丹  
つ いたばめる雀の群れや下萌ゆる  
春 一番畑の表土削ぎて過ぐ  
閨日の何事もなく暮れにけり  
涅槃西風墓地分譲の幟立つ  
一巡り青きを踏みて七千歩  
人形の街の区役所雛飾る  
朝寝して顔中犬に舐められる  
軽き音春田の中の耕運機

風車

秋山信行

ともづなに鴉ゆれゐる冬夕焼  
軽業の梯子立ちたり冬青空  
遠浅を潮の引きゆく群千鳥  
護摩の火や雪しづる音後背に  
抜け道の冬竜胆に屈みけり  
バイパスに切られたる畑はだら雪  
春大根さげて和尚の戻りくる  
種芋を植ゑれば雨の来たりけり  
湯の里の帳場に揺るる吊るし雛  
靈山にただただ回る風車



冴返る

小山ようこ

一番星見つけて春の立ちにけり  
窓だけが取り壊されし余寒かな  
春浅し犬はライトを付けられて  
前に立つ人の後れ毛冴返る  
春寒し点きつ放しの常夜灯  
うららかな痒さうに目をこする人  
花薺二坪ほどの公園に  
春コート小銭はすべてポケットに  
花筵並ぶ周りを歩く鳩  
音楽もかけない夜の春の雷

黄水仙

有賀昌子

三分咲きの啓翁ざくら大壺に  
浅き春手焼き香炉で香を薫く  
雪催落し蓋して魚煮る  
参道に杉の走り根余寒なほ  
過去帖に妻の名「をんな」春寒し  
びんずるの頭つるつる亀鳴けり  
黄水仙岬の先に海ひかり  
システイーナとふカクテルや春の夜  
草萌えや口の重たき夫とゐて  
梅の花こんなところに一里塚

春一番

松村光典

築地にて寿司を楽しむ小正月  
春一番ビニール傘を追ひまはす  
老人のズボン波打つ春嵐  
厚着して車椅子の子春探し  
はくもくれん奥に半月ありにけり  
春うらら猫の目細く細くかな  
春夕焼け人のまばらな公園に  
春分や犬に引かるる人のあり  
年寄りのゆつくり歩く彼岸かな  
公園は子連れ犬連れ春の風

雪みちの黒き一筋辿りけり  
 下萌えや児の一言の「ママが  
 春日射す水際に亀の足の跡  
 どろんこの指先匂ふ露の臺  
 切株の朽ちぬる辺り草青む  
 ブロック塀の目地に咲きたる  
 里の春真直ぐに川ひかりゆく

萩原溪人

枝折れし檸檬の木へとまづ寒肥  
 鍋料理ばかりがつづく冬の夜  
 早咲きの梅の便りの来たりけり  
 子の雛介護施設に飾らるる  
 土手よりの二軍観戦よもぎ摘む  
 受験子は速達を待ち爆睡す  
 芥子菜の花盛りなる中州かな

萩原久代

橋本美代

前籠に焼き芋乗せて走り去る  
旬日を経てなほ残る墓地の雪  
子ら寄りて米寿祝はれむつび月  
鬼打ちや力士の鬣の艶やか  
顎埋め犬に引かれる余寒かな  
千波湖に黒鳥の居て梅盛り  
紅梅や野点の席の客となる

濱野新

胸に花付けて幼児ら卒業す  
卒業歌歌ふ女生徒涙して  
春の日に栗鼠の鳴き声喧し  
春の空にビルのは浅し春の闇  
病室の眠りは浅し春の闇  
退院の夕クシーを待つ春の風  
墓掃除すまし寄り道春の暮

## ◇ 5月・6月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
5月	3日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	國保八江
	3日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	瀬島 孟
	4日(水)	PM7:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	6日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	6日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	21日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	22日(日)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
	28日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬 雅男
6月	3日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	3日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	6日(月)	PM7:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	7日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	國保八江
	7日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	瀬島 孟
	18日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	19日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	谷中墓地・銀座	丑久保 勲
	25日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬 雅男
	26日(日)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

(注) ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

浦和コミセンの数字は集会室。

6月19日(日)の吟行。集合は10時。集合場所はJR山手線・日暮里駅改札口。吟行地は谷中墓地・谷中銀座・夕焼け段々。句会場は滝乃川会館303集会室。

◎連絡先

瀬島 孟 ☎ 048-862-2757	藤井美晴 ☎ 0422-55-2733
大島英昭 ☎ 048-592-5041	WEP編集室 ☎ 03-5368-1870
廣瀬 雅男 ☎ 048-443-7522	浦和コミセン ☎ 048-887-6565
丑久保 勲 ☎ 048-853-3856	WEP俳句教室 WEP編集室へ